

万葉集

[vol.100]

日本に現存する
最古の和歌集「万葉集」を
わかりやすくご紹介します



大津皇子物語

この歌は、天武天皇と大田皇女との間に生まれた大津皇子が、石川郎女に贈った歌です。



あしひきの山のしづくに妹待つと
わが立ち濡れし山のしづくに

訳

あしひきの山の雫に、妹を待つとて私は立ちつづけて濡れたことだ。山の雫に。

大津皇子 卷二(一〇七番歌)

「妹」とは恋人などの親しい女性を指すことばで、ここは歌を贈った相手である石川郎女を意味します。

『万葉集』に登場する「石川郎女」は一人ではなく、同じ名で呼ばれた女性が複数いたようですが、大津皇子と草壁皇子から歌を贈られた「石川郎女」は同一人物であつたとみられています。

石川郎女が大津皇子に返した歌(一〇八番歌)、二人の仲を堂々と宣言した大津皇子の歌(一〇九番歌)、草壁皇子が石川郎女に贈った歌(一一〇番歌)が連続して収められていることから、大津皇子物語とでもいうべきものが形成されていたとみられており、石川郎女をめぐる人間関係が、大津皇子謀反事件の遠因の一つであつた可能性も指摘されています。

この歌では、短い中で第二句と第五句に同じ表現を繰り返し、「山のしづく」に濡れたことを強調してい

ます。古代の恋愛や結婚の歌では、女性の部屋を男性がたずねていく通い婚の描写が多くみられますが、この歌では「山のしづく」とあるとおり、屋外で会う約束をしていた様子がかがえます。一〇九番歌には二人の仲が禁じられていたらしい描写もあり、通常の逢瀬がかなわぬ何らかの事情があつたと考えられています。

これらの歌に先立つ大伯皇女の歌(二〇五・一〇六番歌)には、同母弟である大津皇子の身を案じる様子が表現されており、そこにも「わが立ち濡れし」と同じ表現がみられます。一連の歌は「藤原宮御宇天皇代(ふじわらのみやにあめのしたらしめししすめらみことのみよ)」という標目の冒頭に位置付けられています。史実がどうであつたかは不明ですが、大津皇子の謀反事件に対して同情的な立場で編纂されたと考えられます。

(本文 万葉文化館 井上さやか)



所 葛城市新在家429-1
園 二上山ふるさと公園館
☎0745-48-7800

大津皇子の墓がある二上山の麓にある公園です。広大な敷地の中にピクニックに最適な芝生広場や奈良盆地が一望できる展望台があるほか、木製遊具、おもちゃ館、水遊びができる水辺のテラスなど、大人から子どもまで楽しめるコンテンツが盛りだくさんです。

二上山ふるさと公園(葛城市)

万葉ちゃんのつぶやき

和歌や作者などに関連するものを紹介するよ!



万葉ちゃん